

随想 「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第23回 日本の右翼と左翼は「甘え」の極致

1. 日本の守旧派

日本の守旧派は、「甘え社会」の中でタテの序列に強く力点を置く人たちである。理想的な人間像は、人間を目上、目下に分けて、目上の者に対して従順である人間である。

守旧派が最も嫌う人間像は、「自分で判断し、その判断に対して自分で責任を負う人間」、である。「自分で判断する」ということは、目上に従う代わりに、自分の判断を優先することであり、それは、「生意気」で許しがたいものと感じるようだ。

守旧派も義務や責任を強調するが、その前提として「自分で判断し、選択する」というステップは無視する。自分の判断に対する責任でなく、目上から与えられた義務に対する責任であり、さらには、「公」というような曖昧な観念を持ちだして、「公」に対し責任を負うことを求める。幼児は、自分が好きなことをしても、最後は母親が責任をとってしてくれる。しかし、大人になれば、「自分で判断し、その判断に対し自分で責任を負う人間」にならざるを得ないはずである。しかし、「甘え社会」では、成長する中で、「自分で判断し、選択する」という部分が軽視され、あてがわれたものに対して従順であることが求められる。それにより、「ムラの秩序」は保たれ

るのである。「あてがう」ことも、親の役目であり、かくして親子の保護と依存の関係は、大人になっても維持され、甘えが持続されるのである。

欧米の民主主義国では、親離れをして個人として独立することが求められる。そこでは、「自分で判断し自分で責任を負う人間」でなければ生きていけない。このような人間こそ、「自由」を享受する人間ということになり、人間の尊厳は、「自分で判断し自分で責任を負う」からこそ与えられると考える。

しかし、日本の守旧派は、自分が甘え人間なので、世の中の人間も未熟であってほしいと望み、「自分で判断し、選択する」という個人として確立した人間など存在してほしくない。そのような感情が、「生意気だ」という意識となるのである。

自分の判断に対して責任を感じる人間は、社会人としては、「社会が良いか悪いか、国が良いか悪いかは自分達の責任」というような意識を生む。これこそ、西欧の民主主義社会で築き上げられた社会に対する「責任感」である。しかし、守旧派は、このような意識も大嫌いだ。そのような意識も大嫌いだ。社会を自分たちの責任で作るなどというのは生意気の極地であり、「あてがわれたもの」、あるいは「公」に対し忠実であるこ

とが、理想ということになる。

「自分で判断し自分で責任を負う人間」という人間像を認めると、さらに問題が生じる。年功序列のようなタテの序列が崩壊するのだ。年功は無くとも大きな実績をあげる新参者が出現し、年功はあるが無能で実績のない人間の上に出てしまい、序列が逆転してしまふ。この点からも、守旧派は「自分で判断し自分で責任を負う人間」を嫌うのである。

守旧派の中には、タテの秩序の頂点に天皇を置こうとする者も多く、戦争となれば国のために死ぬことが理想というような思想に発展していく。そのためには、教育勅語教育のような、ものを考えさせない一方通行の「あてがいぶち教育」が理想ということになる。それを徹底すれば徴兵制での軍事教練ということになり、徴兵制の復活を主張する守旧派も多い。

2. 「革新」と言う保守

日本の革新系というのは、平等、それも結果平等を求める集団である。同時に、集団で行動することを好む。日本人が伝統的にもつ、結果平等主義と集団主義を強く求めるのが日本の革新である。

人間にとって周りから差をつけるのは悔しい。隣の子が貰つ

て自分がもらえないとなれば泣き喚いで、「自分もほしいよ」と自分の親に要求する。親は、当然のことながら与えようと努力してくれる。しかし、なんらかの事情で、自分だけもらえなければ被害者意識を持つし、ねたみ、うらみ、足を引つ張りたくなる。まさに「甘え」の世界だ。

この「甘え」の意識を大人になり社会に出ても持ち続けると、社会において「結果の平等」を強く求めるようになる。その意識の特に強い人間が「革新」とよばれる人たちだ。

彼らは、事あるごとに「格差是正」を叫ぶ。格差が出来ることは、自分が周りから差をつけられている状況であり、それは最も気に入らない。それを何とかしろと、政治に要求する。この時の政治家は、甘えた国民にとり、何かをしてくれるはずの母親のような存在となる。

「結果の平等」を求める意識は、この様に日本人の心理に古くから宿る「甘え」から来るものである。これを強く求める革新の本質は、日本の旧来からの意識に依存するという意味で保守そのものであり、しかも極めて強い保守層である。「革新」という名の保守とすべきであろう。

「革新」という保守は、本来の保守と同じく、「自分で判断し

自分で責任を負う人間」が大嫌いだ。この点で、両者は、共通の精神的基盤を持つ。なぜ、革新がこの様な人間像を嫌うかという点、これを認めることにより、実績を上げる優秀な人間と、ろくな実績を上げられない人間が出現し、結果の平等な世界が実現できなくなってしまうからだ。

革新系には、自由を強調する者も多い。しかし、それは、「自分の行動に対して自分で責任を取るから自由」だという、欧米の「自由」とは根本的に異なる。小学校の運動会で、カケッコを止めることが流行った時期があった。その時、「見てください。かけっこで、人と差がつくようなことが無くなって、子供たちは、自由でのびのびしていますよ」という先生が多数いたようだ。革新にとって自由は、競争が無くて、みんな平等というその状態をいうようだ。

80年代ごろまでの革新系は、ソ連や中共を理想としていた。戦後、か弱きインテリの多くが身を投じた革新系は、同時に社会主義、共産主義を強く志向するものであった。そこはみんな一緒に平等な理想社会にみえたようだ。つまり、マルクス主義が自分達の「甘え」を正当化してくれるように思えたのだらう。

70年前後に吹き荒れた学園紛

争も、反代々木系、代々木系に主導された一般学生の参加者の意識にあったのは、結果平等社会の実現であり、社会主義、共産主義に対する漠としたあこがれであった。そして、極めて日本的な現象であるが、具体的な将来の展望が無いにもかかわらず、「なにか変わるかもしれない」との意識だけで動ける日本人の情緒性がそこにあった。

革新系の人間がよく口にする言葉は「権力」だった。足をひっぱって結果平等社会を実現しようとしても、どうしても残る強い支配力、これをまとめて「権力」と表現し、これに対抗することで、自分達の共通意識である結果平等意識を養い保持しようとした。

革新系の「権力」と守旧派の「公」とは、漠然として自分の上位にある存在である点で両者は共通している。

日本の革新系は、集団で行動したがるのも特徴だ。集団主義は甘え社会の特徴であるが、革新という保守層は、ことさらにこの意欲が強い。もたれ合うような、集団意識と集団行動が大好きだ。70年代、天安門広場に紅衛兵があつまり、一斉に赤い毛沢東語録を掲げて叫ぶ姿は、日本の革新系にとって理想的な姿であり、中国は彼らの理想とする社会であった。

最近の革新系は、社会主義、共産主義が自分達の心情を合理化する手段として使えなくなつたので、その正当化に苦勞しているようだ。社会主義国は、平等どころか強権的な権力が人民を強圧的に支配する社会であることが暴露されてしまったからだ。中国は極端な格差社会であり、いまさらその中国を理想社会と言わねはいかないし、人民が飢えている北朝鮮を理想社会と言っても笑われるだけだからである。

そのため、社会主義を持ちだす代わりに、自分達の立場を「結果に差が出て、日々の交流の中で可能な限り平等化を求める」とか、「庶民目線で見れば解答が得られる」などと説明しているようだ。



金子博人
(かねこ ひろひと)
金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)修了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院。日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。